平成 30 年（2018年）7 月 20 日発行

長野県の埋蔵文化財情報誌

信州の遺跡

第13号

最新報告書から 1

中世の山の寺と聖地に築かれた城

松本市　殿村遺跡・虚空蔵山城跡

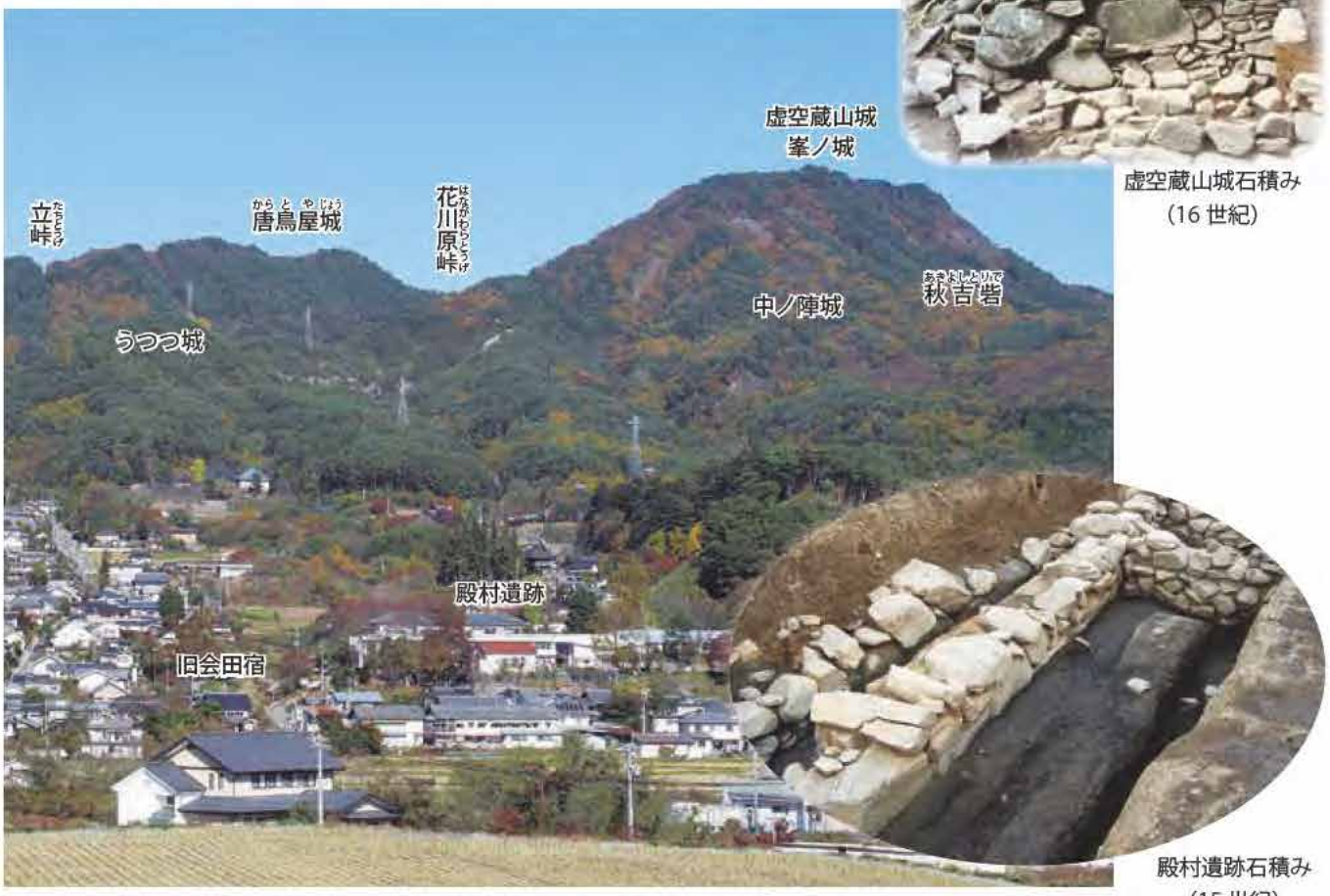
※写真提供：松本市教育委員会

松本市の四賀地区にある殿村遺跡は、会田盆地の北を画する信仰の山、虚空蔵山（1,139m）の麓にあり、南北 350m にわたって中世寺院とみられる平場跡が分布する。過去 9 回発掘が行われ、室町時代（15 世紀）の石積みや輸入陶磁器、茶道具等が多出した。虚空蔵山城跡は、谷間にある雛壇状の平場群を対象に 3 回発掘が行われ、標高 900m を超す高所での居住を示す礎石建物や茶道具、貿易陶磁等を伴う 15 世紀代の寺院から、竪堀、土塁、石積みを伴う 16 世紀代の城郭へと変遷することが判明した。

聖地虚空蔵山を核とする中世の宗教空間や、そこに築かれた城郭のあり方、さらには室町～戦国時代の信濃における石積み技術の発展を考える上で大変興味深い遺跡である。（松本市教育委員会　竹原 学）

（『殿村遺跡 8 次・虚空蔵山城跡 2 ～ 4 次』松本市教育委員会 2018）

虚空蔵山城石積み
（16 世紀）



虚空蔵山城と会田の景観

殿村遺跡石積み
（15 世紀）

最新調査成果から１

栽培種のアワ大量出土！　長野市　県町遺跡

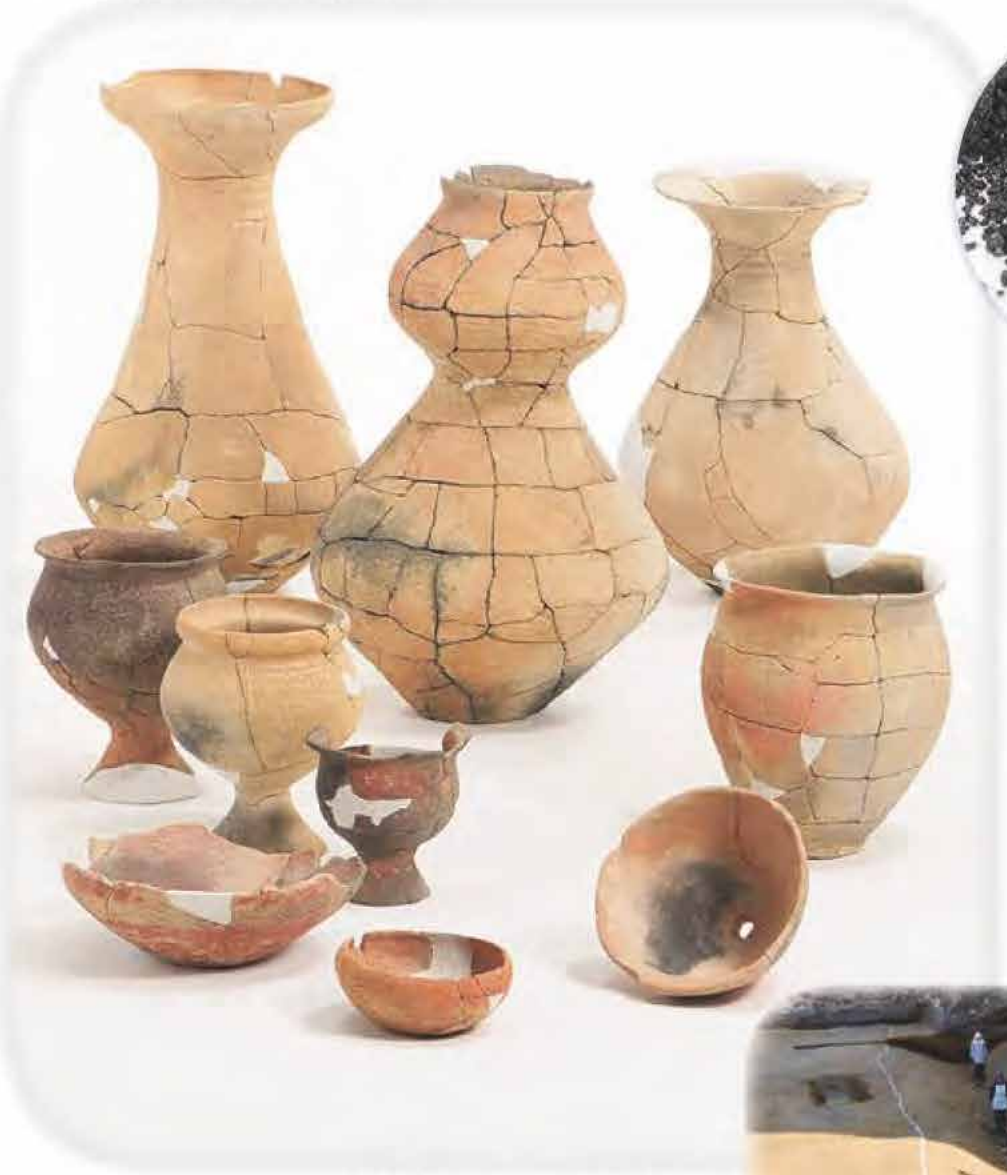
※写真提供：長野市教育委員会

県町遺跡は裾花川河岸段丘上にあり、県庁の東に位置する。主に弥生中期後半と奈良時代～平安前期の集落を発見し、弥生時代では竪穴住居跡５軒と環濠を発見した。環濠は幅約５m、深さ約 1.2 mのＶ字形をした大溝である。竪穴住居跡の床面ではひさご形壺が上下分かれた状態で出土した。高さ約 43㎝でひさご形壺としては非常に大きく、県内では出土例がない。

またほかの住居跡から出土した小壺には、ヒエ・ゼニアオイの種実とともにアワが約３万粒も入っており、分析の結果紀元前後の栽培種であることが分かった。弥生中期後半の農耕に関わる貴重な資料である。

（長野市教育委員会　田中 暁穂）

小壺に入っていたアワ粒



ひさご形壺と一緒に出土した土器
（中央がひさご形壺）

集落の南で検出した環濠

最新調査成果から２

国内最古級！1万年以上前のクリ　上松町　お宮の森裏遺跡

※写真提供：上松町教育委員会

お宮の森裏遺跡は国道 19 号線上松バイパス建設に伴い、平成４～５年度に発掘調査が行われ、縄文時代草創期末の表裏縄文土器期の集落として注目を集めた。

竪穴住居の覆土の水洗選別等で検出されたクリは、調査当時の渡辺誠先生による分析で国内最古の資料として報告されていたが、今回樹種の再同定と放射線炭素による年代測定が行われ、約 12,900 ～ 12,700 年前という結果が得られた。

今後、土器との共伴関係等のさらなる分析が期待されている。

（新谷　和孝）

竪穴住居から出土した
炭化クリの子葉（2 点）

お宮の森裏遺跡（航空写真）

最新調査成果から３

珍しい古墳副葬品の数々　諏訪市　小丸山古墳

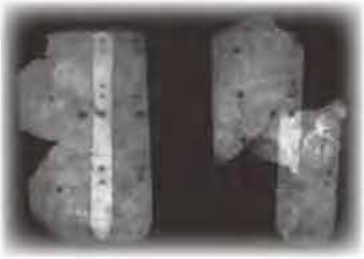
※写真提供：諏訪市教育委員会

小丸山古墳は大正時代以降、数回の発掘調査が実施された。平成 27 年度から実施している出土品再整理と保存処理事業の結果、銀象嵌装大刀が確認されたり、小札甲の具体的な形態が判明するなど多くの成果が得られた。馬具では金銅装と銀装の２組以上の副葬が推定される。

６世紀末頃の築造とみられ、その当時、地域内最上位の人物が諏訪盆地を見渡す有賀峠東側の一帯にいたと推測される。

（諏訪市教育委員会　児玉　利一）

銀象嵌が現れた大刀の刀装具



竪上の腕回りと
みられる幅広の小札

金銅装十字文透心葉形鬙鏡板と銀装雲珠・辻金具

最新報告書から 2

“積石塚” 発見！　飯田市　北方西の原遺跡

※写真提供：飯田市教育委員会

３基の積石塚は、平成 26 年度に実施した発掘調査で確認された。いずれも全体規模は長軸で２m前後と小型であるが、石のみを用いた低い墳丘を有し、方形を意識した平面形状となっている。埋葬施設は地山を掘り込んだ墓壙内にあり、平天井で箱形石棺状を呈するが、一方の小口部に横口を意識した構造が認められる。２号積石塚から刀子１点・鉄鏃２点、３号積石塚から鉄鏃１点が出土しており、５世紀後半と考えられる。

これまで“積石塚”不在とされてきた飯田下伊那地域での発見は、馬匹生産の実態や飯田古墳群成立の背景を考える上でも注意される。（飯田市教育委員会　渋谷 恵美子）（『北方西の原遺跡』飯田市教育委員会 2017）

３基の積石塚

埋葬施設（２号積石塚）

最新報告書から 3

松本盆地で最初の王墓が作られた頃のムラ　松本市　出川南遺跡

東日本で最古級の前方後方墳である弘法山古墳から 1.4km 西の、松本盆地南部の田川左岸に立地する出川南遺跡から、古墳時代前期から中期の集落跡が発見された。古墳の造営に関わった人々が暮らしたと思われる集落（ムラ）の跡の可能性もある。

遺跡からは、西三河を中心とした東海系土器が多数見つかり、東海地方と交流があったことや、さらに古墳時代後期以降集落域が移動することも判明した。（川崎 保）（『出川南遺跡』長野県埋蔵文化財センター 2018）

出川南遺跡調査区

出川南遺跡出土土器

銅鐸レプリカの完成―中野市柳沢遺跡出土の銅鐸の再現―

平成19年、中野市柳沢遺跡で東日本初の発見となる青銅器埋納坑から、銅鐸5点・銅戈8点が出土した。西日本を中心に行われていた青銅器を用いる祭りが、北信濃でも行われていたことが分かる大変貴重な資料として、国の重要文化財に指定された。長野県埋蔵文化財センターでは、この貴重な青銅器を学校や博物館での教材として活用するため、柳沢2号銅鐸の実物大模造品を製作した。

実測図を参考に文様の割り付けを推定復元して本物に近づけた銅鐸は金色に輝き、青銅器の重さも体感できて、当センターにおける展示や体験授業で好評をいただいている。（廣田 和穂）

1　模型と型枠の作成

4　脱型

2　型枠に砂を詰めこむ

3　鋳込み

5　完成

協力：株式会社 コヤマ．株式会社 小松製作所

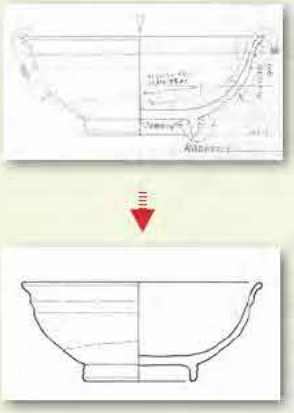
埋文キーワード　～トレース～

『信州の遺跡』第４号で紹介した「発掘現場の測量」、第６号で取り上げた「土器の実測」で作成した鉛筆描きの図面を印刷物（発掘調査報告書等）に掲載するに当たり、墨入れ（製図）の加工をする作業を「トレース」という。

トレースには現在、土器等を実測した図面を製図用ペンでトレーシングペーパー上に写す「手トレース」、発掘現場で作成した遺構の実測図面等をコンピュータに取り込み、コンピュータ上でマウスなどを用いて行う「デジタルトレース」がある。製図用ペンによる手トレースは、なめらかで継ぎ目のない線が要求されるため、熟練を要する。

コンピュータの進歩により、遺構図に関してはデジタルトレースが主流になってきているが、遺物図には微妙な質感が要求されるものもあり、手トレースも行われている。（黒岩　隆）

土器断面図の手トレース作業



左上：土器実測図
左下：土器トレース図

遺構図のデジタルトレース作業

埋文本棚

なぜ海のない長野県で海洋考古学？と思われた方もおられるだろうが、実は日本における水中遺跡調査の先駆けは、諏訪湖湖底にある曽根遺跡である。

しかも本書で扱う「海洋考古学」とは海だけでなく、それに繋がる水上・水辺までも含めた人類の活動を考古学的手法で探求する学問で、水中考古学はその一分野・一調査方法にすぎない。

本書は「第１部　水中・海事考古学」、「第２部　島嶼・沿岸考古学と民族考古学」、「第３部　動物考古学」の３部構成からなり、その見出しからは海洋考古学の射程の広さ、豊富に取り上げられた事例からは、海洋と陸の有機的な結びつきが分かる。

本書には、太平洋と日本海へ繋がる長大な河川をもち、両海洋からの文化・文物の結節点に位置している長野県の歴史を知る上でも非常に示唆的な内容が盛り込まれている。（石丸　敦史）

『海洋考古学入門　方法と実践』
木村淳・小野林太郎・丸山真史編著
東海大学出版部 2018

珍しきもの　和同開珎（わどうかいちん）　長野市浅川扇状地遺跡群（桐原地区）出土

平成24年度の発掘調査で出土した銭貨が県内24例目の「和同開珎」だと判明したのは平成29年度のことであり、長野市で初めての出土事例となった。冨本銭に続く公的銭貨である和同開珎は、本格的に流通した最初の貨幣とされ、『続日本紀（しょくにほんぎ）』には和銅元年（708年）8月に鋳造されたと記されている。

県内では東山道が通っていたとされる飯田市・塩尻市・上田市・佐久市などの遺跡から見つかっている事例が多い。とくに、伊那郡衙（ぐんが）が設置されていたと推定される飯田市恒川（ごんが）遺跡群でも確認されている。こうした官道や官衙といった中央政府との関係が深いとみられる場所での出土例が多いことを考えると、今回出土した和同開珎は長野市（旧水内郡）における官道や官衙とのつながりを示すものである可能性を秘めている。

（柴田 洋孝）

クリーニング前

クリーニング後

長野県埋蔵文化財センターの展示室を公開しています

長野県埋蔵文化財センターでは、発掘・整理作業中の遺跡の成果を展示室にて公開しています。現在発掘中の遺跡で見つかったばかりのさまざまな遺物や整理作業で接合・復元した土器、分析を行って分かったことなど、最新の成果をご覧いただけます。

展示品は随時、入れ替えを行っています。職員が展示解説をいたしますので、ぜひお気軽にお立ち寄りください。

★埋文センター展示室のご案内★

☆公開日：月～金曜日（年末年始・お盆休み（今年は8/13～8/15）・祝日を除く）

☆公開時間：午前9時から午後5時まで

☆入場無料

※ご入場の際は、受付に一声お声掛け下さい。

※団体での御利用は事前に連絡をお願いします。

考古学の窓 ～神と祭り～

夏である。各地で夏祭りが行われている。私の住む小諸市でも７月の健速神社の祇園祭で本格的な夏が幕をあける。スサノオノミコトを祭神とし、疫病を追い払い、虫封じ・風封じ等を願う祭りである。祭りの季節にちなみ、ここで古代の神祭りについて考えてみたい。

雨境峠の鳴石

古代日本の神は自然と一体化した存在であり、しかも「祟る神」でもあった。人間は自然の中で生きるものだが、自然と対決せざるをえない面もあり、自然災害や疫病を含む自然の脅威は神の仕業と考えられていた。古代人は、こうした祟る神に対しては、祭りを執り行って慰め、祟りを鎮めようとした。神を招いて御馳走を振る舞い、相撲や神輿、踊りなどを披露して、神を喜ばすのである。

遺跡の発掘調査では、神祭り（祭祀）を行った痕跡や、それに用いられた祭祀遺物が発見されることがあり、当時の祭祀・信仰を解明するための手がかりとなる。古墳時代では、鏡や剣、玉類を模した石製模造品が代表的な祭祀遺物である。住居跡やムラの一画の祭場などから出土することが多いが、峠から出土することもあり、峠でも祭祀が行われていたことがわかる。ちなみに石製模造品が出土する峠は、本県の神坂峠（阿智村）、雨境峠（立科町）、瓜生坂（佐久市）、入山峠（軽井沢町）のみである。

峠神については、日本書紀と古事記に興味深いヤマトタケルの説話がある。ヤマトタケルは「碓日坂」（入山峠）から「科野坂」（神坂峠）を超えて美濃へ向かうが、「科野坂」では白鹿に化した峠神を倒している。その後、近江の伊吹山に荒ぶる神がいることを知り、退治しようとするが、逆に山神の怒りにふれて死に至る。峠神には勝ったヤマトタケルが山神には負けてしまったということは、この説話が生まれた時期には、峠神はすでに祭祀で鎮められていたのに対して、山神への祭祀はまだ行われておらず、山はみだりに入ってはならないものと考えられていたことのあらわれであろう。

神祭りは、自然との対立を鎮めるために始まったものであり、それは自然の中で人間が生きていくために不可欠なものであった。対立するからといって自然を破壊しては元も子もない。祭りを通して「自然と折り合いをつける」という先人の叡智を大切にしたいと思う。（櫻井 秀雄）

編集後記

まことに残念ながら、これまで年２回発行だった『信州の遺跡』が、今年度は今号の１回だけとなった。そういえば、今号をまとめるために調べた昨年度県内発行の発掘調査報告書も随分少なくかつ薄くなった。当センター発行の報告書も昨年度は今回紹介した松本市の出川南遺跡１冊だけである。

そのなかで、中世寺院から中世城郭への変遷が窺える松本市殿村遺跡・虚空蔵山城跡や、前々号で紹介した前方後方墳のほかに積石塚も検出した飯田市北方西の原遺跡は、内容に富んだものである。いつもは冬号だった「最新調査成果から」も今号での掲載となった。大型のひさご形壺が出土した長野市の県町遺跡のほか、出土したクリの年代測定を行った上松町のお宮の森裏遺跡、出土品の再整理と保存処理を行った諏訪市の小丸山古墳といった科学分析等で大きな成果が上がった遺跡を取り上げることができた。

調査が少なく人員も減った昨今、じっくりと以前の成果を見直したり、普及活動をしたりするにはよい機会かもしれない。（上田 真、若林 卓）

本号で掲載した遺跡位置

(一財)長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007　長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926　FAX 026-293-8157
http://naganomaibun.or.jp/　印刷：奥山印刷工業株式会社
この冊子は、平成30年度 地域の特色ある埋蔵文化財活用事業で作成しました。